



島根大学コレクション 2007

# Shimane University Collection 2007

学び舎に遺されたコレクションの数々

Shimane University Museum

# 「島根大学コレクション2007」の発刊によせて

豊かな自然と歴史・文化遺産に恵まれた地にある島根大学では、生物学、地質学など標本を扱う自然科学や歴史学、考古学などの研究が伝統的に盛んであり、先輩の先生方が研究の過程で収集したり教育研究のために寄贈されたりした資試料が数多く蓄積されてきました。しかし、それらを保管、展示する施設がほとんど無かったために、教員が退官した後は行方不明になったり、捨てられてしまったりしたものも少なくありませんでした。

また、本学は、平成16年度から国立大学法人として発足しましたが、各大学に強く求められた個性化、差別化を実現するためのツールがあまり見あたらない…、これまで培ってきた教育や研究の成果を、本学が標榜する「地域に根ざした個性豊かな大学創り」に結びつけることがなかなかうまくいかない…、学生はもとより、教職員の多くもこの大学でどのような研究が行われ、教育によってどのような逸材が世に出て活躍してきたのかを知らない…といった状況でした。

こうした問題を具体的に改善するために、本学にユニバーシティ・ミュージアムを設置する機運が高まっていたところ、学内外のご理解・ご支援が稔り、平成18年度から島根大学ミュージアムを発足させることができました。

このミュージアムは、ミュージアム本館を核に、山陰地域・汽水域資料展示室、古代出雲文化資料調査室、附属図書館、同窓会連合会展示コーナー、ミニ学術植物園など、各部署の既存の個別展示収蔵施設をネットワーク化して、資料の研究・管理、キャンパスツアーや博物館教育などの教育普及に活用するものです。

本書は、こうした活動の一環として、まず学内の各部署にある所蔵資料調査を実施し、主な資料を要約的に紹介したものです。本学には、この他にも歴大な資料が所蔵されていますが、その整理と公開は、今後の地道な長期的作業が必要になってきます。

本書の刊行、及び島根大学ミュージアムの活動が、大学教職員・学生と市民との架け橋になり、地域の文化創生に少しでも寄与できれば、と考えています。皆様のご指導・ご教示を何卒お願い申し上げます。

平成19年3月

島根大学学術国際担当副学長  
島根大学ミュージアム館長

高 安 克 己



# Shimane University Collection 2007

<b>I. 島根大学の主な展示施設</b> .....	3
1 松江キャンパス	
2 出雲キャンパス	
<b>II. 島根大学の主なコレクション</b> .....	11
1 動物	
2 昆虫	
3 植物・海藻	
4 化石	
5 鉱物・岩石	
6 考古資料	
7 記録史料	
8 建築	
<b>III. 写真資料でみる島根大学前身校の歴史</b> ....	23
1 松江高等学校	
2 島根師範学校 ほか	
3 県立島根農科大学 ほか	





# I. 島根大学の主な展示施設

## exhibition rooms

「島根大学ミュージアム」は、キャンパスにある様々な施設・資料を「まるごとミュージアム」にしたものである。

これは、北欧やフランスなどで発達した「オープンエアミュージアム」・「エコミュージアム」の発想にならったもので、地域全体を博物館としてとらえ、既存の資源・施設を有効活用しながら、新しい理念を注入して運営していくニューミュージアムの概念である。

# 松江 キャンパス



※展示施設はすべて見学無料。

※附属図書館以外の屋内施設は、祝休日・年末年始(12月29日～1月4日)休館。

## 交通アクセス JR松江駅より

- 市営バス  
北循環線内回りで島根大学前下車(約15分)
- 一畑バス  
美保関ターミナル・東高校・ソフトビジネスパーク各方面行きで  
島根大学前下車(約15分)
- タクシー  
約10分



## 1 島根大学ミュージアム本館



島根大学のキャンパス内は、大学ミュージアム(平成6～17年度は埋蔵文化財調査研究センター)によって、永年にわたり発掘調査がおこなわれてきた。本展示室では、主に、こうした島大

キャンパスから出土した貴重な考古資料をはじめ、各部局から移管を受けた標本類などが展示されている。

また、本館には、ミュージアム職員が常駐し、島根大学ミュージアムの総合案内、情報発信などを行っている。

■月～金・午前9時～午後5時開館。開館時間内は自由に見学できる。事前に予約すれば、祝休日でも開館。

## 2 正門門柱(国登録文化財)



1924(大正13)年3月建造。松江市忌部産花崗岩(白御影石)製の正門柱2、脇門柱2からなる。旧制松江高等学校の正門として制作・使用された後、島根大学の正門として受け継がれた。

四周には、方形などの幾何学模様が施されている。



## 3 「総合理工学部」研究紹介コーナー(総合理工学部3号館1階ロビー)



総合理工学部の教育研究内容や所蔵標本の一部が展示してある。

■月～金・午前8時30分～午後5時開館。開館時間内は自由に見学できる。

## 4 ミニ学術植物園「みのりの小道」(生物資源科学部棟周辺)

生物資源科学部によって運営されている、くつろぎながら学べる植物園。

花壇などのほか、研究成果や豆知識などを説明したパネルを配置。整備作業には、学生や地域市民も参加している。

■年中無休。自由に見学できる。



## 5 「古代出雲文化資料調査室」展示室(ミュージアム本館北隣)

法文学部考古学研究室が所蔵する考古資料の一部を展示している。1953(昭和28)年、文理学部の一室に設けられた標本室が、1978(昭和53)年、「法文学部歴史学陳列室」となり、2005(平成17)年3月、「古代出雲文化資料調査室」2階に移設された。

ほう大な量の収蔵資料は、故山本清名誉教授によって収集されたものや旧制松江高等学校に保管されていたものなどからなり、日本の考古学を研究するうえで大変貴重なものが多く含まれている。

■普段は閉館しているが、見学希望者は、ミュージアム本館の職員に申し込めば開館する。



## 6 山陰地域・汽水域資料展示室(汽水域研究センター1階内)

「汽水域研究センター」の前身である「山陰地域研究総合センター」が中心となり、昭和62年10月に「山陰地域研究総合センター資料展示室」が開設された。本展示室は、平成4年4月に「汽水域研究センター」が設置されたことに伴い、これを引き継いだものである。

動物標本、化石・岩石標本、考古資料など、山陰地域・汽水域に関わる様々な分野の資料が総合的に展示してある。

■月～金・午前9時～午後4時開館。見学希望者は、ミュージアム本館の職員か汽水域研究センター事務室の職員に申し込めば対応。予約不要。



## 7 「同窓会連合会」展示コーナー



島根大学や前身校である松江高等学校・島根師範学校・島根農科大学、島根医科大学などの学校史に関わる写真・資料などが展示してある。

■月～金・午前10時～午後3時開館。開館時間内は自由に見学できる。

## 8 附属図書館本館



附属図書館本館には、一般の蔵書のほか、膨大な量の古文書、絵図、貴重資料などが所蔵されている。

正面入口を入って左側にミニ展示コーナーがあるほか、3階に小泉八雲関係の書籍・パネルを展示した「八雲文庫(8:30～17:00)」が設けてある。

■開館時間／月～金：午前9時～午後9時30分(授業のない期間は午後5時まで)、土・日・祝休日：午前10時～午後5時30分(授業のない期間は休館)

■休館日／授業のない期間の土・日・祝休日、定例図書整理日(偶数月第4水曜日)、年末年始(12月29日～1月4日)、特別整理期間(8月中旬及び3月下旬)

## 9 「菅田ヶ丘古墳」移築展示



第2食堂の横には、移築復元された「菅田ヶ丘古墳」がある。もともとは、ここから西方約50mの丘の上にあった、長さ約30m・高さ約3.5mの古墳である。5世紀後半頃につくられたと考えられている。



■年中無休。自由に見学できる。

# 出雲 キャンパス



## 交通アクセス JR出雲市駅より

- 一畑バス：出雲市駅バス乗場(北口)  
市民会館・島根医大・上塩治車庫行きで島根医大病院下車  
市内循環左まわり(150円バス)・上塩治車庫行きで島根医大入口下車  
須佐行・根波行きで島根医大病院下車  
※朝夕で経由しない便もありますので、ご確認ください。
- タクシー  
南口から約5分



1 附属図書館医学分館



附属図書館医学分館には、一般の蔵書のほか、古医書、明治以前の医療器具などがある。このうち、医療器具や解説パネルなどが、1階入口や2階閲覧室前廊下の展示コーナーで一般公開されている。

■開館時間／月～金：午前9時～午後8時、土・日・祝休日：午前10時～午後4時

■休館日／年末年始（12月28日～1月4日）その他分館長が認めた日



\*2階閲覧室前廊下では、華岡青洲の業績、大森不明堂三楽が学んだ華岡流医術、不明堂の医学塾生活、地元母里藩に帰国後の大森家の診療など、10枚のパネルで、大森文庫の内容を概観することができる。

\*2005年10月実施の大森文庫講演会について、館内でDVD視聴できる。





## Ⅱ. 島根大学の主なコレクション

collection

# 動物

[Animals]

鳥根大学にある動物標本は、教育学部の前身である師範学校の時代から県内で収集されてきたものが多い。その一部は、汽水域研究センターやミュージアム本館に収蔵、展示されている。このなかには、明治時代に捕獲され、現在では絶滅してしまった種類も含まれており、高い学術的価値をもっている。その他、医学部環境予防医学教室では、国内でも充実した条虫・線虫・吸虫などのホルマリン標本を所蔵しており、全国の医療機関から同定依頼がある。



ニホンアシカ剥製標本(汽水域研究センター提供)

## ニホンアシカ剥製標本

所蔵部局・研究室●汽水域研究センター

採取地●島根県松江市美保関町

時代●1886(明治19)年2月

解説●ニホンアシカ(アシカ科)は、カリフォルニアアシカの亜種で、かつては日本海西南部海域を中心に多数生息していた。しかし、江戸時代から明治時代にかけて大量に捕獲され、とくに日本海の竹島周辺で毛皮や食用に大規模に捕獲されたため、1950年代以降、捕獲、目撃の記録がなく、絶滅したものと考えられている。

本標本は、1886(明治19)年2月に島根県松江市美保関町で捕獲されたもので、以来、島根師範学校に保管されていた。若い雄で体長120cm。ニホンアシカの剥製標本としては国内でも数少ないものの一つである。国外には、江戸時代に来日したドイツ人医師シーボルトが持ち帰ったものがオランダ国立自然史博物館に3点収蔵されているほか、大英博物館に毛皮標本1体と頭骨4点があるのみで、世界的にも非常に貴重な標本である。

## 隠岐馬骨格標本

所蔵部局・研究室●汽水域研究センター

採取地●隠岐(島後)

時代●1888(明治21)年3月

解説●隠岐馬は、日本馬の一種で、体高が低い隠岐在来の矮小馬である。1899(明治39)年と1936(昭和11)年の2回にわたる日本馬政局の馬政計画の実施により、隠岐馬の雄はすべて去勢され、絶滅した。

本標本は、隠岐馬の骨格標本としては、国内で唯一のもので、1888(明治21)年3月、松江市にあった獣医学講習所において、家畜解剖学研究のため、獣医・佐藤清明氏の手により解剖、組み立てられ、以来、島根師範学校、教育学部に受け継がれた。

12才の雄馬で、生体の毛色は青黒色、丈は1m18cm。



隠岐馬骨格標本(汽水域研究センター提供)

## チョウザメ剥製標本

所蔵部局・研究室●ミュージアム

採取地●日本海(島根県松江市美保関町で水揚げ)

時代●昭和初期以前

解説●チョウザメは、生きた化石と呼ばれるシーラカンスが多く生息していた時代(約3億年以上前)からの残存種で、うろこがチョウの形をしていることから名付けられた。魚肉や「キャビア」と呼ばれる卵は高級食材として珍重されている。普段は海で暮らし、卵を産むために川に上ってくるタイプの魚で、日本では、北海道や東北地方の沿岸でまれに見られるだけになってしまった。

本標本は、明治～昭和初期頃に松江市美保関で捕獲されたといわれており、島根師範学校から島根大学教育学部に受け継がれてきたものである。当時は、美保関でしばしば捕獲されたらしく、学術的にもきわめて貴重な標本である。全体長1.6m。



チョウザメ剥製標本

## 日本海裂頭条虫

所蔵部局・研究室●医学部環境予防医学

解説●写真は、島根県在住の女性から駆虫された日本海裂頭条虫である。

日本海裂頭条虫は、サナダムシ(条虫)の一種で、山根洋右島根大学前副学長らによって発見された。

サクラマスやカラフトマスの筋肉内に長さ1cm程の白い幼虫(プレロセルコイド)が寄生しており、ヒト(終宿主)が、この幼虫を刺身や寿司などで食べると感染し、小腸で写真のような成虫になる。

成虫は、頭節、頸部、未熟体節、成熟体節からなり、頭節の吸溝(きゅうこう)で宿主の腸粘膜に吸着して、体を固定する。成熟体節は数千個におよび、各片節に雌雄両方の生殖器を持ち、子宮内には虫卵が充満している。体表に密生する微小毛から小腸内の栄養物を吸収する。

島根大学医学部環境予防医学教室には、日本各地から裂頭条虫類の同定依頼が寄せられ、現在約150の検体が保管されている。



日本海裂頭条虫(医学部環境予防医学提供)

# 昆虫

[Insects]

## ハチに擬態した昆虫

所蔵部局・研究室●生物資源科学部生態環境科学科動物生態学分野

解説●本学研究室のスタッフと学生たちが長年にわたって収集した、ハチに擬態した昆虫類の標本である。

他の昆虫に似せる擬態は、大きく「ベーツ型擬態」と「ミユラー型擬態」の2種に分類できる。

毒がない昆虫が、毒がある昆虫に似せることを「ベーツ型擬態」、毒がある昆虫同士が互いに似せあうことを「ミユラー型擬態」と呼んでいる。



ハチ類にベーツ型擬態した昆虫類標本  
(生物資源科学部生態環境科学科動物生態学分野提供)



ドロムシ類  
(生物資源科学部生態環境科学科動物生態学分野提供)

## ドロムシ類

所蔵部局・研究室●生物資源科学部生態環境科学科動物生態学分野

解説●ドロムシ類は小さな甲虫(体長:1.5~5.0mm)で、多くは2~3mmである。川の下流で生活している種は体にしばしば泥をまとっているため、それにちなんで「ドロ」のついた和名になったのかもしれない。

日本では、ドロムシ科が2種、ヒメドロムシ科が50種記録されている。島根県の河川では24種、大山の記録を含めると26種、そのうち20種を島根大学で所蔵している。島根県の河川の26種は、日本の屋久島以南の種を除くと、全既知種の71%にあたり、種類数が豊富である。

本学研究室に所蔵されているアヤスジミゾドロムシは、島根県の限られた河川で生息が確認されている。

島根大学にある昆虫標本は、生物資源科学部生態環境科学科環境生物学講座が長年の研究の過程で収集したもので、約五〇〇箱からなる。タイプ標本も多く含まれる。

## カマバチ類

所蔵部局・研究室●生物資源科学部生態環境科学科動物生態学分野

解説●カマバチ類はウンカ・ヨコバイ類に寄生するハチの仲間であり、多くの種の雌成虫は前脚の先端部をハサミ状に変化させている。そのハサミ状の先端部を使って寄主を捕らえ、それに産卵し、時にはそれを捕食する。

成虫の大きさは通常3~5mmである。多くの種の雌は、翅(ハネ)を持っていないので、アリと見間違えられる。

世界では1,000種余りの記録があり、日本における現存既知種は9種となる。本学研究室が所蔵する標本は、長年の生態研究によって採集した6種+α(不明種)である。

写真は、カマバチの分類群を集大成したイタリアのMassimo Olmiによって、日本の種で最初に同定された貴重な標本で、彼の著書の日本産種の記述や図版の基にもなっている。



カマバチ類(生物資源科学部生態環境科学科動物生態学分野提供)

# 植物・海藻

[Plants and Seaweeds]

島根大学にある植物標本は、三瓶演習林で収集されたさく葉標本・樹木種子標本や汽水域研究センター所蔵の樹木標本、生物資源科学部が所蔵するさく葉標本約200箱などがあり、いずれも島根県内を中心に収集されたものである。この他、隠岐臨海実験所には、多数の海藻液浸標本、海藻さく葉標本などが所蔵されている。

また、教育学部秋山研究室および大谷研究室による長年の調査研究で採集された宍道湖・中海の藻類標本、ミュージアムが作製した島根大学構内遺跡出土の縄文時代を中心とする材プレパレート標本も水環境や古植生の変遷を知るうえで学術的に貴重な資料である。

## 三瓶演習林収集のさく葉標本・種子標本

所蔵部局・研究室 ● 生物資源科学部附属生物資源教育研究センター

採取地 ● 島根大学三瓶演習林(島根県大田市)

解説 ● 島根大学では、大学が研究教育を行うために総面積約600haの演習林を所有している。

ここでは、さく葉標本、種子・果実標本(液漬標本・乾燥標本)が収蔵されている。現在、さく葉標本は木本30科48属67種、草本30科53属64種、種子・果実標本は、木本を中心に30科46属69種が保存されている。

また、近年はデジタル画像も1,000枚以上収集され、一般の方も利用閲覧できるようにインターネット上で公開している。



さく葉標本(生物資源科学部附属生物資源教育研究センター提供)



種子標本(生物資源科学部附属生物資源教育研究センター提供)

## 宍道湖・中海の珪藻

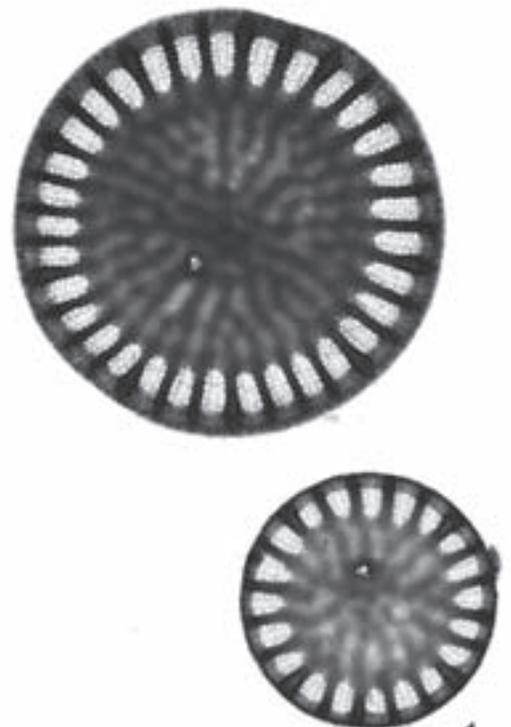
所蔵部局・研究室 ● 教育学部大谷研究室

採取地 ● 宍道湖・中海

時代 ● 1966年～2006年

解説 ● 本コレクションは、教育学部秋山優研究室および大谷修司研究室が、1966年からの調査によって、採取・収集したものである。1994年から現在までは、大谷研究室が、宍道湖・中海の植物プランクトンの調査を島根県保健環境科学研究所と共同で毎月行っており、すべての試料が本研究室に保管されている。宍道湖は一部欠落した年もあるが約40年間、中海では11年間の試料が蓄積されている。

写真は、宍道湖・中海でたびたび優占種となることがある珪藻類ヒメマルケイソウ属の電子顕微鏡写真である。大きさの違う2個の死んだ殻を正面から見たところで、細かい放射上の模様を観察される。珪藻は生きていたときは茶色の色素をもち、樹木と同じように光合成を行っている生物である。珪藻の殻はガラス質でできているため遺骸は分解されずに湖底に堆積する。真水や海水によって生育する種類が異なっていることから遺骸を顕微鏡で観察することによって、過去の水質を知ることが可能である。宍道湖・中海からは8種類のヒメマルケイソウが知られているが、この写真の種類はこれまでに報告された種類と一致せず、新種の可能性が残されている。



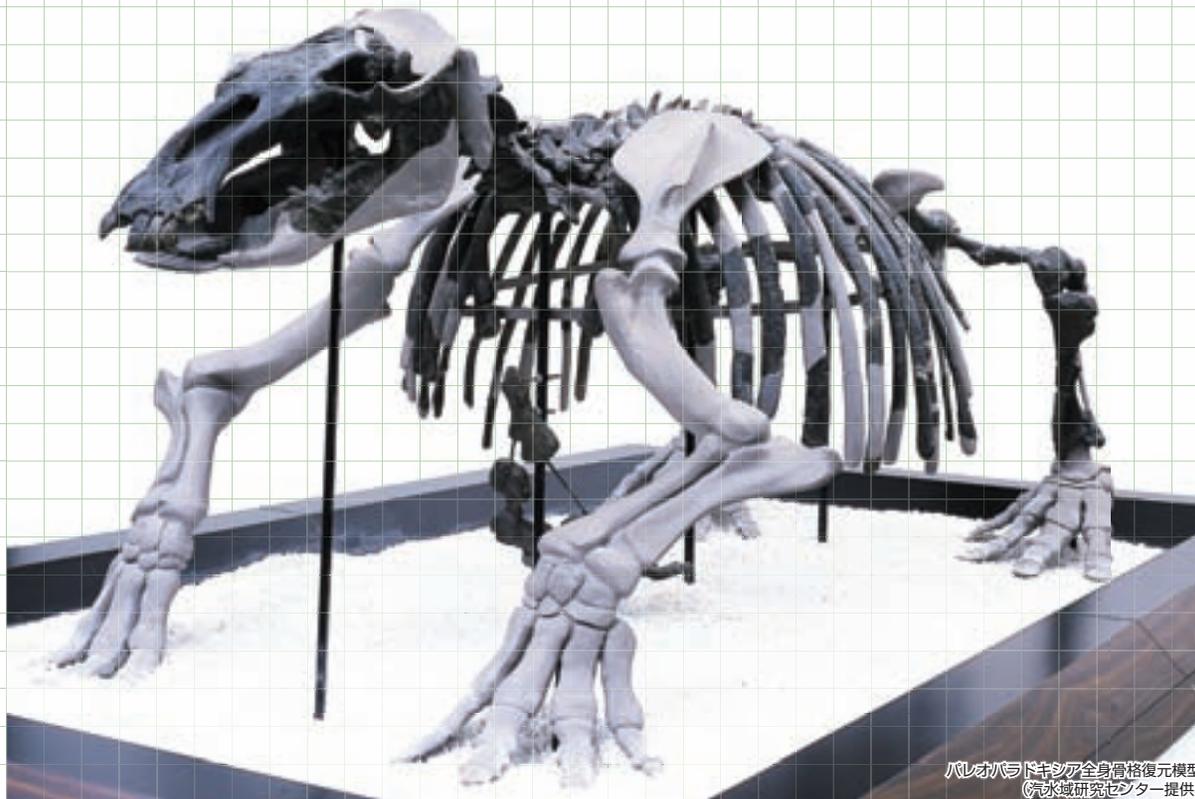
珪藻類ヒメマルケイソウ属  
(教育学部大谷研究室提供)

1 μm

# 化石

## 【Fossils】

島根大学にある化石標本は、旧理学部および現総合理工学部が永年の研究教育の過程で収集したものである。ぼう大な量が所蔵されており、主に第三紀中新世に属する資料が多く、出雲地域で発見・記載され、地名に由来する和名学名をもつ資料も含まれている。このほか、汽水域研究センター「山陰地域・汽水域資料展示室」には、第三紀中新世の哺乳類パレオパラドキシア全身骨格レプリカが展示されている。



パレオパラドキシア全身骨格復元模型  
(汽水域研究センター提供)

### パレオパラドキシア全身骨格復元模型

所蔵部局・研究室 ● 汽水域研究センター

解説 ● パレオパラドキシアは、約1300万年前に絶滅したほ乳類東柱目に属する現在のカバに似た動物である。生態や分類上の系統的な位置は不明な部分が多く、「謎に満ちた古生物」といわれている。島根県からは、松江市玉湯町の来待石砕石場から下顎骨の化石が発見されている。

写真の全身骨格復元模型は、1982年に岡山県津山市で発見された約90点の骨格化石にもとづいて、学生の卒論テーマとして1年がかりで組み立てられたものである。パレオパラドキシアのような現在生息していない生物の復元は、それ自体が研究であると同時に、長年にかけて蓄積された様々な研究成果の集大成でもある。

### カイミジンコ化石

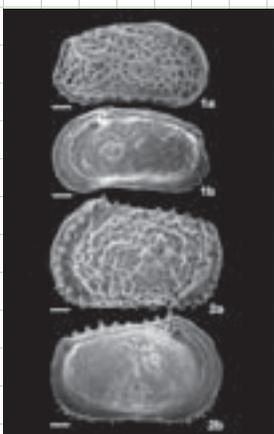
所蔵部局・研究室 ● 総合理工学部地球資源環境学科

採取地 ● 岐阜県恵那市

時代 ● 第三紀中新世

解説 ● カイミジンコは田んぼから深海までのあらゆる水塊に生息する体長1mmほどの小さな生物で、カニ、エビなどと同じ甲殻類の仲間である。二枚貝のように2枚の堅い石灰質の殻を持ち、その中に動物体が収められている。化石として残るのは外側の殻である。

写真は、岐阜県恵那市に分布する、今から1700~1800万年前の地層から産出したカイミジンコの仲間で、殻の表面に様々な装飾を持つホロタイプ標本である(スケールは0.1mm)。



カイミジンコ化石  
(総合理工学部地球資源環境学科提供)

### 出雲地域の地名がついた軟体動物化石

所蔵部局・研究室 ● 総合理工学部地球資源環境学科

採取地 ● 島根県松江市浜乃木・布志名

時代 ● 第三紀中新世

解説 ● 総合理工学部地球資源環境学科が収集した資料である。

出雲地域では、今から1300万年前頃に浅海で堆積した、主に泥からなる地層(布志名層)が広く分布しており、そこから貝化石が採取される。

そのなかには、写真の標本のように、出雲地域で最初に発見され、その地名が学名や和名についているものがある。

写真上は、イズモノアシタガイ(登録番号DGSU T211)。松江市浜乃木で採取された細長いマテガイの仲間である。写真中は、フジナウバトリガイ(登録番号DGSU T569)。松江市浜乃木で採取されたザルガイの仲間である。写真下は、ミズホバリス・イズモエンシス(登録番号DGSU T3485)。松江市布志名で採取されたタコブネの殻の化石である。



軟体動物化石  
(総合理工学部地球資源環境学科提供)

# 鉱物・岩石

[Minerals and Rocks]

島根大学にある鉱物・岩石標本は、総合理工学部が永年の研究教育の過程で収集したものである。ぼう大な量の標本があり、このなかには、本学で発見、記載された鉱物なども含まれている。このほか、教育学部林研究室で収集された南極大陸の岩石標本などもあり、一部は、ミュージアム本館で展示されている。

## 加納輝石

所蔵部局・研究室 ● 総合理工学部地球資源環境学科

採取地 ● 北海道渡島半島八雲町熊石館平

解 説 ● 加納輝石は、マンガンとマグネシウムからなる単斜晶系の輝石族鉱物である。淡紅褐色をした鉱物で、結晶の大きさは0.1mm程度である。

1977年、当時島根大学理学部地質学科教授であった小林英夫氏によって北海道渡島半島八雲町熊石館平の海岸に近い岩礁から発見された。本鉱物名は秋田大学鉱山学部加納博教授（現名誉教授）にちなんだもので、加納教授の還暦祝いとして献名された。日本で新鉱物として発見された輝石族鉱物は加納輝石だけであり、日本人の名前がついている輝石もこれだけである。



加納輝石(総合理工学部地球資源環境学科提供)

## 南極の石

所蔵部局・研究室 ● ミュージアム(教育学部林研究室から移管)

採取地 ● 南極大陸

解 説 ● 教育学部林正久教授が採集した資料である。

写真上は、南極大陸の風の磨耗作用によって生じた平滑面を持つ風稜石である。平滑面は、吹き飛ばされる砂粒が長い時間をかけてサンドペーパーのように石の表面を磨いて出来たものである。風向が季節によって異なると別の平滑面が作られ、面と面の間は尖った稜で画される。4つの稜線があるピラミッド型や3つの稜線があるテトラ型(三稜石)など多様なタイプがある。写真の資料は、ラングホブデ産の風稜石で、ザクロ石片麻岩やペグマタイトなど、比較的硬い岩石が磨かれたものである。

写真下(左)は砂漠ワニスの付着した礫で、表面は皮膜のようにコーティングされている。砂漠ワニスとは、褐色のニスを塗ったかのような光沢を示すもので、礫の内部にある極微細な結晶面やひびに沿って、地表の水分が毛細管現象で上昇し、石の表面で蒸発、水に含まれる化学成分が析出・蓄積されてできたものである。ある期間水分が存在し、その後、乾燥したような環境下でできるといわれる。

写真下(右)は、蒸発岩である。水が蒸発昇華すると水中に含まれるカルシウムやナトリウムなどの塩類が析出する。こうしてできた石膏や塩化ナトリウムは二次的な鉱物で蒸発岩と呼ばれる。



ピラミッド型やテトラ型の風稜石



砂漠ワニスの付着した礫(左)と石膏(右)

# 考古資料

[Archaeological specimens]

島根大学にある考古資料のうち、法文学部考古学研究室所蔵のぼう大な資料は、故山本清名誉教授等によって収集されたもの、旧制松江高等学校に保管されていたもの、法文学部考古学研究室による永年の発掘調査によって出土したものなどからなり、山陰地域や日本における考古学研究上、欠かすことのできないものが含まれている。多くは、古代出雲文化資料調査室で保管されており、一部は展示公開されている。

また、平成6年度から島根大学キャンパス内の発掘調査が継続して実施されており、ここで出土した考古資料が、ミュージアム本館に収蔵・展示されている。縄文時代を中心とする土器・石器・木製品などがあり、特に縄文前期の完全な状態の櫛・ヤス柄は全国的にも希少な資料である。



松江キャンパス出土の縄文土器



松江キャンパス出土の櫛・ヤス柄

## 松江キャンパス出土の縄文土器 (西川津式)

所蔵部局・研究室●ミュージアム

出土地●島根大学構内遺跡(橋縄手地区)

島根県松江市西川津町・島根大学松江キャンパス第2体育館

時代●縄文時代前期初頭

解説●縄文土器(「西川津式」土器)の鉢で、約6000年以上前のものとみられる。

2枚貝の貝殻で土器の表面を調整したのち、細かい粘土紐を貼り付けて文様になっている。類似する土器は、九州や朝鮮半島南部でも出土しており、当時から日本海を通じて交流があったことがうかがえる。

復元口径29.5cm、復元高15.0cm。

## 松江キャンパス出土の櫛・ヤス柄

所蔵部局・研究室●ミュージアム

出土地●島根大学構内遺跡(橋縄手地区)

島根県松江市西川津町・島根大学松江キャンパス武道場

時代●縄文時代前期

解説●スギ製で、約5200年前(C14年代値)のものと思われる。

当時の水辺だった場所から並べて置かれた状態で出土した。当時、島大キャンパスは水辺にあったことがわかる。縄文時代の櫛やヤスの柄が、完全な状態で残っているのは、全国的にもきわめて珍しいことである。

櫛A(写真右端)が、全長178cm・最大径3.5cm・水かき部長さ42cm。櫛B(写真中央)が、全長172cm・最大径3.5cm・水かき部長さ33cm。ヤス柄(写真左端)が、全長258.5cm・最大径2.5cm。

## 松江キャンパス出土の石器

所蔵部局・研究室●ミュージアム

出土地●島根大学構内遺跡(橋縄手地区)

島根県松江市西川津町・島根大学(松江キャンパス)

時代●縄文時代

解説●いずれも島根大学松江キャンパスから出土した縄文時代を中心とする石器類である。

写真左は、石錘(石のおもり)である。大小の河原石の両端を打ち欠いてエグリをいれ、巻きつけた縄がはずれ

ないようにしてある。網などのオモリにして、魚を捕獲した。

写真中は、石鏃(せきぞく=石の矢じり)である。下列の2点は、長さ約2.1~2.5cmほどの大きさで、隠岐島から調達してきた黒曜石を巧みに加工したものである。

写真右は、すり石(右)と石皿(左)である。ドングリなどをすりつぶすのに使用した。石皿の表面は平滑になっており、長年、使い込んだ跡がうかがえる。



松江キャンパス出土の石器



西谷3号墓出土の弥生土器

### 西谷3号墓出土の弥生土器

所蔵部局・研究室●法文学部考古学研究室

出土地●西谷3号墓(鳥根県出雲市大津町)

時代●弥生時代後期

解説●西谷3号墓は、鳥根県出雲市大津町にある弥生時代後期(約1800年前)の「弥生墳丘墓」で、出雲平野に本拠をおいた大首長の墓と考えられている。

本資料は、法文学部考古学研究室が、1983(昭和58)年以來、継続しておこなってきた発掘調査によって出土したものである。

その規模や外表施設の壮大なこと、出土土器が大量で、かつ各地からの搬入品がかなり含まれていること、埋葬施設の特異なことなどで注目され、荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡とならんで弥生時代の出雲を代表する遺跡として全国的に知られている。



薬師山古墳出土の須恵器(法文学部考古学研究室提供)

### 薬師山古墳出土の須恵器

所蔵部局・研究室●法文学部考古学研究室

出土地●薬師山古墳(鳥根県松江市西川津町・鳥根大学松江キャンパス)

時代●古墳時代中期

解説●1922(大正11)年の夏ごろ、旧制松江高等学校の寮の増築に伴って、裏山の本を伐採した際、薬師山古墳が発見され、発掘調査がなされた。

この発掘で出土した遺物は、旧制松江高等学校に保管、鳥根大学法文学部考古学研究室に引き継がれ、今日にいたっている。

写真の出土した須恵器は、故山本清名誉教授の研究によって、日本考古学における須恵器研究の基準資料(タイプ標本)となっている。



高田山寺ノ峯経塚出土の陶製四耳壺  
(法文学部考古学研究室提供)

### 高田山寺ノ峯経塚出土の陶製四耳壺

所蔵部局・研究室●法文学部考古学研究室

出土地●高田山寺ノ峯経塚(隠岐郡西ノ島町)

時代●平安時代

解説●写真は、隠岐西ノ島の高田山寺ノ峯経塚から出土した中国製の陶製四耳壺(とうせいしじこ)である。高さ31cmで器表の全面には褐色の釉がかかる。

経塚は、大切な経典を保存しておこうという信仰から、壺などに仏教の経典を入れ、地下に埋めて塚としたものであり、平安時代末期から鎌倉時代にもっとも多く作られた。

この高田山寺ノ峯経塚は、山陰を代表する経塚であり、写真の陶製四耳壺は、経典を保護する外容器として埋められたとみられる。古代末から中世における信仰を物語る貴重な資料である。

# 記録史料

[Archives]

島根大学にある記録資料は、主に附属図書館本館・出雲分館で収集されてきた。主に古代から近世・近代までの文書・絵図などからなり、出雲・隠岐・石見の各地域に根ざした内容となっている。このほか、大学や前身校に関わる写真資料やぼう大な量の事務文書などが収蔵保管されている。

## 大智度論 巻62・67

所蔵部局・研究室●附属図書館本館

時代●734(天平6)年

解説●大智度論は、龍樹の著作とされている『大品般若経』の注釈書である。本学所蔵の紙本墨書大智度論2巻は、石山寺一切経中のもので、734(天平6)年の古写本である。

巻62は卷子本で、表紙は錦、見返しに金箔を散らし、朱塗木軸、紫組紐で、戦後、改装したものである。巻67は折本で、表紙には厚紙を用いている。

奥書には、巻62に「天平六年歲次甲戌十一月廿三日写、針間(播磨)國賀茂郡既多寺、針間國造小君」とあり、巻67に「針間直名着賣」とある。

2巻とも昭和41年5月31日、島根県の有形文化財の指定を受けている。



大智度論(附属図書館提供)

## 熊谷家旧蔵文書

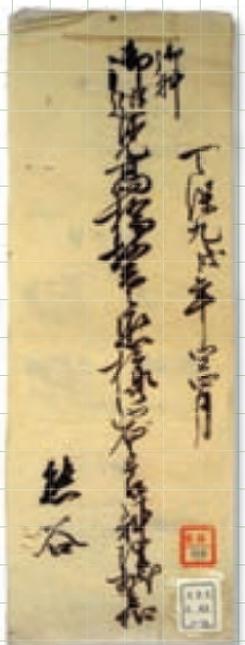
所蔵部局・研究室●附属図書館本館

時代●1762(宝暦12)年～1918(大正7)年

解説●大田市大森町「熊谷家旧蔵文書」は、多くが大田市立図書館に寄託されているが、1967年、本学が、一部の731点を入手した。

江戸時代の熊谷家は、石見国瀬摩郡大森町(島根県大田市大森町)の町人で、18世紀の初めから石見銀山附幕府領を治めた大森代官所の掛屋・用達などを務めた家である。

本学所蔵の熊谷家文書の特徴は、「宗門人別改帳」など、石見銀山領の村々の支配にかかわる文書が多くあることである。住民を登録した帳簿である「宗門人別改帳」は、銀山領の多くの村々について、人口学的研究が行える貴重なデータである。



熊谷家旧蔵文書(附属図書館提供)

## 林家旧蔵文書

所蔵部局・研究室●附属図書館本館

時代●1539(天文8)年～1893(明治26)年

解説●大田市五十猛町「林家旧蔵文書」606点は、1957年、本学が当時の文部省特別経費で購入したものである。

林家は、江戸時代年貢を大坂ないし江戸へ積み出す湊として栄えた大田市五十猛の大浦にあり、銀山領の年貢米を江戸へ積み送る廻船問屋として財をなした。

銀山領の年貢米は、江戸時代前期には温泉津から積み出されていたが、江戸時代後期には大浦からも積み出されるようになった。林家文書はこれら銀山領年貢廻米の実態を明らかにする貴重な史料群を多く含んでいる。



林家旧蔵文書(附属図書館提供)

## 松江城下町絵図<堀尾期>

所蔵部局・研究室●附属図書館本館

時代●1620(元和6)年～1633(寛永10)年

解説●本学が、1980年に購入したものである。

城下町松江は、17世紀初頭に堀尾吉晴によって建設された。この絵図は1620(元和6)年～1633(寛永10)年の間に描かれたと推定できる城下図で、近世初頭における城下町建設の構造的意図を分析する上で貴重な資料である。

また、永い時間が経過しても絵図の色彩・色調が美しい点が特筆される。141×117cm。



松江城下町絵図<堀尾期>(附属図書館提供)

## 桑原文庫

所蔵部局・研究室●附属図書館本館

解説●明治の先覚的な社会事業家であり、浮世絵、彫金など美術工芸の研究家としても著名な、松江市東茶町出身の桑原羊次郎の自著と旧蔵書、3083冊からなる文庫である。

松江藩地方役岸崎左久次(時照)が著わした出雲国風土記の最初の研究書「出雲風土記抄」や、松江藩主の奥方が興入れの際、持参したと思われる100冊あまりの和歌の写本がある。この「嫁入本」は、良質の鳥の子紙を使い、表紙の見返しは銀地に金砂子をちりばめた豪華なものである。



桑原文庫(附属図書館提供)

## 小泉八雲関係資料

所蔵部局・研究室●附属図書館本館

時代●明治時代

解説●小泉八雲が、島根県尋常中学校の教頭西田千太郎氏宛に出した自筆書簡45通とその関連資料である。

書簡の内容は、病気見舞い、近況報告、取材活動、異文化理解、教育論など多岐にわたり、作品成立過程の舞台裏やハーンの世界観、率直な人柄などをうかがい知ることができる。



小泉八雲自筆書簡(附属図書館提供)

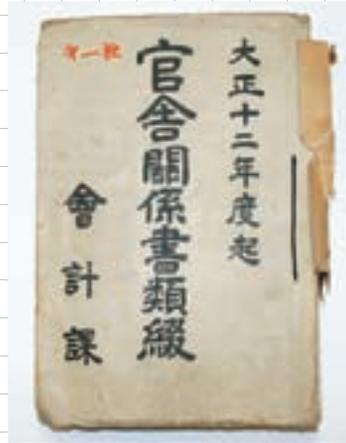
## 大学史資料

所蔵部局・研究室●事務局

時代●明治時代～現代

解説●本学や前身校である旧制松江高等学校、島根師範学校、県立島根農科大学などの足跡を示す写真、事務文書、書籍など様々な資料からなる。卒業生や退官された教官から寄贈された資料も多い。

資料の一部は、「同窓会連合会」展示コーナーで展示されている。



旧制松江高等学校時代の事務文書

## シーボルト授与の修業証書など

所蔵部局・研究室●附属図書館本館

時代●江戸時代後期

解説●1955年、西山・松村画家から本学に寄贈された資料である。

神門郡萩原村(現出雲市萩原町)の医師・西山砂保が、1825(文政8)年、長崎鳴滝塾に医学修行のためにおもむいた際の他藩通鑑状(通行手形)、宗門証状、1826(文政9)年、修行を終えフォン・シーボルトから高弟湊長安を介して授与された修業証書(蘭文修行証書付:音訳文、翻訳文)などが含まれている。



シーボルト授与の修業証書(附属図書館提供)

## 大森文庫

所蔵部局・研究室●附属図書館医学分館

時代●江戸時代

解説●安来市大森家から旧島根医科大学に寄贈された資料である。

朝鮮アサガオを主薬にした「麻沸散(まふつさん)」による全身麻酔によって乳がんの摘出手術に成功し、わが国の外科に一大革命をもたらした「華岡青洲(はなおかせいしゅう)」口述の医書『乳岩弁症』、『瘍科瑣言』など、貴重な古医書が多数含まれている。

わが国の医学史を研究する上で重要な医学史料コレクションである。373点(555冊)。



大森文庫(附属図書館提供)



旧制松江高等学校本館の写真

# 建築

[Architecture]

現在の島根大学松江キャンパスは、前身校である旧制松江高等学校の校地を引き継いでいるが、当時の建造物はほとんど残されていない。花崗岩製の正門門柱が、開学当時の風雪を耐えてきた、ほとんど唯一の構造物である。また、キャンパス外では、松江城下町のなかにかつて旧制松江高等学校外国人宿舎として使用されていた洋風建築が残されている。これらの建築物は、本校の学校史における貴重な資料であるとともに、地域における近代建築史や国際交流史を物語る資料といえる。



島根大学旧奥谷宿舎(旧制松江高等学校外国人宿舎)



宿舎の内部

## 島根大学旧奥谷宿舎 (旧制松江高等学校外国人宿舎)

所蔵部局・研究室●事務局

場 所●島根県松江市奥谷町140

時 代●1924(大正13)年11月落成

解 説●旧制松江高等学校の外国人講師向けに築造された2階建て洋風建築の官舎。当初、同一企画の1号官舎(独語講師居住用)と2号官舎(英語講師居住用)2棟が並んで建てていたが、2号官舎は、1937年3月28日、火事で全焼した。

木造2階建てで、2階の張り出し部分を玄関ポーチの柱で支える。外壁は、1階が木製の横板張り、2階がセメントモルタル投げ付け塗り仕上げ。2連及び3連の連続窓

を四周に付ける。内部は多くが改装されているが、階段や1階北東隅部屋内の天井・壁は、築造当初の漆喰塗りの状況を留めている。

第1号官舎には、「著作権の父」として有名なウィルヘルム・ブラーゲ、第二の小泉八雲として慕われているフリッツ・カルシュらが暮らしていた。

戦後、島根大学に引き継がれてからは、宿泊施設や独身宿舎として利用されていたが、現在は使用されていない。現在の建物面積は、137㎡。

2006(平成18)年12月、国の登録有形文化財(建造物)に登録された。

## 島根大学正門(旧制松江高等学校正門)

所蔵部局・研究室●事務局

場 所●島根県松江市西川津町1060

島根大学松江キャンパス

時 代●1924(大正13)年3月

解 説●松江市忌部産の花崗岩(白御影石)製の正門柱2、脇門柱2からなる。旧制松江高等学校の正門として制作・使用された後、島根大学の正門として受け継がれた。当初は、キャンパス南西隅部にあったが、1970年12月に現在の場所に移築された。

門柱頂部が十字形にかたどられ、四周には方形を基調とした、セセッション風<sup>\*</sup>の幾何学模様がほどこされている。

大きさは、正門柱が高さ2.1m・1.2m角。脇門柱が、高さ1.7m・0.76m角。

2006(平成18)年12月、国の登録有形文化財(建造物)に登録された。

<sup>\*</sup>セセッション…19～20世紀初頭にかけてドイツ、オーストリアの芸術革新運動から生まれた様式。建築分野では、方形を基調とした幾何学的なデザインが特徴。この様式を日本に紹介したのは、松江高等学校の校章をデザインした武田五一(京都帝国大学建築学科初代教授)であると言われている。



島根大学正門  
(旧制松江高等学校正門)



# Ⅲ. 写真資料でみる島根大学前身校の歴史

## history

島根大学は、前身校を含めると、明治8年以来、130年以上の歴史をもつ高等教育機関である。

これらの前身校は、日本や島根県が近代化・成熟化するなかで、学問・教育の拠点として重要な役割をはたしてきた。本章では、本学が所蔵する写真資料から、わが校の歴史や伝統についてふりかえてみたい。

■参考文献／島根大学開学三十周年史編集委員会編『島根大学史』1981年

明治8年 小学教員伝習所					
明治9年 松江師範学校 浜田師範学校	明治11~14年 松江女子師範学校				
明治17年 島根県師範学校					
明治19年 島根県尋常師範学校 (明治19~30年 女子部)					
明治31年 島根県師範学校	明治36年 島根県女子師範学校	昭和8年 県立実業公民学校教員養成所	大正9年 松江高等学校	大正10年 県立益田農林学校	
		昭和10年 県立青年学校教員養成所			
昭和18年 島根師範学校		昭和19年 島根青年師範学校		昭和22年 県立農林専門学校	
昭和24年 島根大学教育学部			昭和24年 島根大学文理学部	昭和26年 県立島根農科大学	
			昭和53年 島根大学法文学部	昭和53年 島根大学理学部	昭和40年 島根大学農学部
			平成7年 島根大学総合理工学部	平成7年 島根大学生物資源科学部	平成15年 島根大学医学部
平成16年 国立大学法人「島根大学」					

# 1 松江高等学校 (大正9年～昭和25年)

明治から昭和のはじめにかけての激動の時代、今の教育制度では失われてしまった高等教育機関、旧制高等学校があった。島根大学の前身校のひとつ、松江高等学校は、大正9(1920)年、水の都・松江に設立された全国で17番目の旧制高校である。当時の松江高等学校は、「談論風発を日々の生活の旨とした自由な校風(日本マクドナルド創業者・故藤田田氏談)」だったといわれている。

## 今はなき学び舎

松江高等学校の校地は、現在の島根大学松江キャンパスにあった。工事は、大正9(1920)年5月に着工し、翌年3月までに、グラウンドを除く整地が完了した。しかし、大正10(1921)年度からの授業開始までに校舎の建設が間にあわず、当初は、県立松江中学校の5教室を利用した。

大正10(1921)年12月20日、ようやく木造2階建て本館が竣工し、大正11(1922)年1月から新校舎での授業が始まった。



松江高校全景



自習寮



校門と本館



建造時の本館(大正10年12月10日)



本館入口



講堂

## 水の都と青春と

たくさんの仲間たちとの邂逅、語り、別れ…。大正から昭和という時代の波に翻弄されながらも、若者達が青春を謳歌していた様子が、写真から伝わってくる。



松江高校応援団



伝統の街頭ストーム  
(松江大橋北詰/昭和17年4月29日)



全国高校陸上競技大会で団体優勝した松高陸上競技部  
(明治神宮外苑グラウンド/昭和5年7月27日)



大橋川でのボートレース  
(昭和17年4月29日)

## 蛭雪の功

当時は、文科と理科があり、第1外国語によって甲類(英語)・乙類(ドイツ語)に分かれていた。

松江高等学校第1期生のうち、卒業できたものは82パーセントであり、勉学に対する学校の態度は、非常に厳しいものだった。



和文独訳の授業風景



化学の講義風景(昭和初年)



生物学の実習風景(昭和初年)



ドイツ語の授業風景



化学の実験風景(昭和5年頃)



物理学の講義風景(昭和3年頃)

## さらば滋高

敗戦後、新しい教育制度である六・三・三・四制が決定された。旧制高校は、存続運動が各地ですすめられたものの、結局は廃止となった。

昭和25年1月、松江高等学校卒業生216名を送り出す最後の卒業式が挙行された。そして3月31日、生徒・教職員が「青春の歌」を斉唱するなか、原田虎男第9代校長の手によって、本館正面玄関の校章と校門の門標がはずされた。

松江高等学校は、今はもうない。しかし、その伝統は、現在の島根大学のなかに脈々と受け継がれている。



門標をはずす原田校長

校章降納式(昭和25年3月31日)

## 2 島根師範学校ほか (明治8年～昭和24年)

明治時代、日本がいち早く近代化に成功した理由のひとつに、教育制度の普及があったといわれている。

「師範学校」とは、戦前まであった、学校教員を養成する高等教育機関である。その歴史は古く、島根県では、明治8年「小学教員伝習所(島根県・浜田県)」～明治9年「松江師範学校」「浜田師範学校」～明治17年「島根県師範学校」～明治19年「島根県尋常師範学校」～明治30年「島根県師範学校」～昭和18年「島根県女子師範学校」と統合し「島根師範学校」となる。現在の島根大学教育学部の前身校である。

ここから、島根県や日本の教育をになった、たくさんの人材が輩出されていった。

### 木造校舎

島根師範学校男子部は、月照寺の隣、現在の松江市立第1中学校(松江市外中原町)の場所にあった。



師範学校男子部全景。清光院境内より。



師範学校男子部



師範学校男子部 正面玄関



師範学校の庭



奉安庫

### 学校生活

昭和18年度頃の師範学校の教科は、国民科(修身公民、国語漢文、歴史など)、教育科(教育、心理など)、理数科(数学、生物など)、実業科(農業工業など)、体錬科(体操、武道など)、芸能科(音楽、書道など)、外国語科など多様であり、ある科目を選択して深く学習することもできた。



屋外での授業(松江大橋にて)



図書館



校舎前にて



郷土室

## 女子の高等教育

明治11年、全国的にも早く、女子教員を養成する松江女子師範が松江(殿町19番地)に設置された。明治14年にいったん廃止されるものの、明治19年に鳥根県尋常師範学校女子部として復活、明治30年にまた廃止されたのち、明治36年、鳥根県女子師範学校として出雲今市に設置された。大正12年、浜田の新校舎に移転、昭和18年に、国立鳥根師範学校女子部となった。ドイツ政府から赤十字第二等名誉章を贈られた山脇房子を輩出するなど、女子の高等教育に重要な役割をはたした。



鳥根県女子師範学校(浜田/昭和5年)



家事実習



研修旅行(出雲大社にて)



音楽会

## 鳥根師範学校から鳥根大学教育学部へ

昭和24年、国立鳥根大学が発足したのにもない、鳥根師範学校は同校教育学部に包摂された。校舎は、旧師範学校が使用されたが、昭和37年までに現在の松江キャンパスへ順次移転された。元の師範学校校舎(松江市外中原町)は、昭和38年、教育学部附属中学校として使用された。鳥根大学教育学部になって以降も多くの教育者を輩出し、鳥根県や日本の教育にとって、計り知れない役割を果たし続けている。



教育学部音楽教室(松江キャンパス/昭和38年)



教育学部附属中学校(松江市外中原町)

# 3 県立島根農科大学ほか(大正10年~昭和40年)

農業は、我々の暮らしの基礎となる最も重要な産業であり、自然に恵まれた島根県でも、大地に根ざした農林業の高等教育が行われてきた。

大正10(1921)年4月の益田農林学校、終戦後間もない昭和22年9月の島根県立農林専門学校、昭和26年4月の島根県立島根農科大学を経て、昭和40年4月、島根大学農学部が設置される。

こうした高等教育機関は、島根県における農林業振興になくてはならない役割を果たした。

## 県立農林専門学校

島根県立農林専門学校は、昭和22年9月、益田農林学校が昇格して発足した。設立についての意見書には、「農村文化の向上を計るは文化国家建設の礎石を培ふことにして再建日本の大道なり」とある。第1期生は、76名(農科41名・林科35名)であった。発足当初、学生たちは、創設の意気に燃え、盛大な体育祭や仮装行列を行ったという。



開校当時の農林専門学校全景(益田/昭和22年)



開校当時の農林専門学校正面(昭和22年)



体育祭後の仮装行列(昭和22年10月)

## 県立島根農科大学

昭和26年4月、県立農林専門学校が昇格して、県立島根農科大学が発足した。

校舎は、松江市乃木福富町に設置された。農学・林学・農林経済学の3課程からなり、総定員360名であった。

本学では、どの課程に進んでも、広く農林業に通じることができる幅広い農学士を養成することをねらいにしていた。



農科大学本館東正面(昭和27年)



農科大学本館後方より(昭和28年)



農科大学新館の一部(昭和27年)



農科大学の講堂(昭和26年)

## 県立島根農科大学から島根大学農学部へ

昭和40年、県立島根農科大学が国に移管され、島根大学農学部が発足した。

昭和44年に農学専攻科、昭和46年に大学院農学研究科、昭和49年には農学科と環境保全学科が新設され、島根県における農林業分野の教育研究が、新しい歩みを進めることとなった。



農学部本館・南棟



竣工時の農学部本館・南棟(昭和42年)

## 農場

農学部の教育研究にとって、農場・演習林は不可欠である。

県立島根農科大学～島根大学農学部は、三瓶、神西、本庄(昭和38年までは乃木福富町)、匹見などに農場・演習林を持っており、現在も、地域に親しまれながら、活用されている。



本庄農場のコンピューター制御システム化施設(昭和49年7月)



農科大学農場事務室(松江市乃木福富町/昭和26年)



本庄農場温室内



本庄農場温室

## 編集後記

平成 18 年度から発足した島根大学ミュージアムの設置を提言した学内委員会「キャンパスミュージアム（仮称）設置検討委員会」は、平成 17 年 7 月 14 日～9 月 16 日の間、島根大学各部局が保管している標本資料類調査を全学で実施した。この調査によって、本学に様々な標本資料類が所蔵されていることが改めて認識された。

また、学内各部局の教職員にお願いして、こうした所蔵標本資料類を分かりやすく紹介する新聞連載を平成 18 年 5 月からおこなっている。

本冊子は、上記の資料調査や新聞連載をもとにして本学所蔵標本資料類の一端を簡略的に紹介したものである。紙幅の制約から、全資料を網羅したものではないため、遺漏分は、今後のさらなる調査成果も含めて、改めて別の冊子やホームページ (<http://museum.shimane-u.ac.jp/>) で紹介していきたい。

なお、本冊子の刊行に際し、ご協力いただきました本学教職員の皆様には、文末ですが、改めて感謝申し上げます。

(E)

島根大学コレクション 2007

平成 19 年 3 月 30 日

編集・発行 島根大学ミュージアム

印刷 (株) エッグ





学ぼう! 活かそう! 伝えよう! しまだいのDNA

## 島根大学ミュージアム

〒690-8504 島根県松江市西川津町1060 TEL・FAX0852-32-6469

[ホームページ] <http://museum.shimane-u.ac.jp/>